

結 章 学校法人日本体育会経営幼稚園と専門学校の課題と展望

く結びにかえて

日体幼稚園が日本体育会あさひ幼稚園として開園されてからの卒園生は少なくない。昭和三十一年三月から平成三年三月までの三十六年の間に四、九二二名（内、男児二、七二一名、女児二、二〇一名）が卒園している。また、開園以来、本園は優秀な児童の入園が得られてきたために、有名私立幼稚園のひとつに数えられるようになった。また、体育教育による健康第一主義の教育方針に加え、そのような有名幼稚園の評価がなされるようになったことは本園の将来への不安を払拭するものであった。出生率の低下に伴う幼稚園児の減少の影響を受ける心配、すなわち入園希望者の減少の心配がなくなっているからである。とまれこのような評価は一朝一夕に出来上がったのではなく、本園に務め、幼児教育に情熱を傾け続けてきた関係者の日常的な努力の積み重ねによるといわねばならない。したがって、日体幼稚園の課題は従前の教育方針を踏襲しつつ、新時代に羽ばたく園児の健康教育に意を尽くさずれば、自ずとその展望が拓けていくといえよう。

いっぽう、情報化時代に入って人びとの運動不足が深刻な問題となり、新たな文明病が社会問題となってきたが、この時代に日体柔整専門学校が設立された。すなわち柔道整復師養成機関である本校は健康問題が深刻になってきた時代を的確に捉えて、現代人の健康問題の解決の一端を担うべく設立されたのである。以来、日体柔整専門学校は設立の当初から順調にその実績を重ねてきた。昭和五十年三月に第一期の卒業生五〇名を世に送り出してから平成三年三月までに一、〇一六名の柔道整復師が巣立っていったのである。彼らの多くは柔道整復師を職業としてい

るが、ある者はリハビリセンターのような医療機関に柔道整復師として務め、またある者は開業して自らの体得した技術を世のために役立てているのである。このような実績が物語っているように、本校への入学希望者は跡を絶つ心配がなくなつた。したがって、日体幼稚園の場合と同様に、本校の課題は従前の教育方針を踏襲し、これを貫徹していくならば、本校の将来は限りなく拓けていくであらう。